近世說美少年錄

1279
9

1279
9

曲亭翁馬琴著作

近世説美少年録

村田

近世説美少年録第二輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第十七回

校賢利を説く季孟を和ぐ
黒吏勢を扈て役夫を屠る

話表柳本弾正忠幽友の日毎の出頭時めいて暇なき身を宿所へも語来る人々の名簿苞苴のヨヌ房をもせんもなくそなたへ家に在りける折執進の若黨が遽しく主の身退ぞ求く香西殿の幻使末松珠之丞と名告るの拜謁を請まつるいと計ひやうきんと告るを國友ようてぐ兄ぐら快らぬ尉殿元盛の使ぐ對面して何ぞせん且その来意を諾れよと若黨ぞろく客房のうちに赴たる程もあらぐ使て則御意の趣を彼ぞん使ぞ知りて禀さるあらぐ美らんとのひとと此もう日ぐ氣色

る。否一大事の議ゐ伺れい人傳ゑ述ぐ。さく見参を許ーゆゑ御主君に
ちん為へとまうびぞるゐゆと報ぜ。囚友冷笑ぞを情剛ゆ奴ゑ。面魂を
ぞあらん幾十歳許の男ぞと問へ若黨さゆ年尚二八可き女子わそ
ほ元美少年ゆくゆとゆゐ囚友眉を顰めく。實ゐ大事の使ゑ。ぞ出頭の老
黨のそゆゆせるべ元とるゐ相応らぬ小孺ゑ。そいひをそるいのく訝ー紙れが
とく猶あいどとのつく憶ーゐけ。とゆられ者共ゆ。呼立て近習二名を後へ。
童扈役ゐ大刀を持ーく出て珠之丞ゐ對面を登時末松珠之丞ゐ携ゑ来る
一包の湯銚を傷ゐ措く囚友をそくゆを膝ゐ。額をもたげ自
自若とーく在りーゐ囚友怒ゆる声高ゆゐ汝い尉殿の使ゑゆ欲京師も近
屬事ゆくて。旰食宵衣を被るまぞゐ公務をその身の任とまられ使者ゐ
あゐ元暇いるけれど大事の「議ゑとらゆい枉く對面を許せゐ。礼の挙動奇

怪ゑ憶ゐ汝い乳臭元小孺ゑの分際で主の使をよくせゆ。おを必ず兄の猛ゐ
病痾ゐ犯されゐ。乱心の沙汰るべ。益元と敦圉でそゆ身を起ー席を
跟立く奥ゐ入らんとまる程ゐ珠之丞い衝と寄く袴の裾を引で元。やゑ刀桶の
雲妻時等せゆ在下ゆ祢を侮とく。拝ゆるこの遅ゆゐ。今目前の利を出い
ぞゐ同胞睦ゑゆ元と歎くのゆまるゐ礼ゐ違ひく。不敬の罪を犯くるのゑ在下不肖
ゆりとのくゆ賤者ゑ貴人ゑ敬ゐ可の礼伐い知ゆ。小るゐ刀祢い在下ゆ不敬を咎
めゆべ。子とーくい親を敬ひ弟とーくい兄を敬ゐ。その元ゑ忘れゆ。欲同胞年来
疎遠ゐーく。その使ゑ。憎ゑゆゆと人ゑ道とゆ元ゆ。とゆられて囚友驚元なゆら。
且く佐とゐんゆくゆゐ優ゑ汝ゆ諫言只一句ゐーくその意ゑ汲ゑ。と猶へく
ゆくび坐を占ゆゆ珠之丞も退ゆく。故ゆ処ゐ伺ゆーく囚友近く招元とゆく目今
汝ゆ意見の趣理りあるゐ似ゆれども。これ豈年来兄を疎ゑく。胡越のなりひと

なきものなるべしや。かれは総角なりし比より。館に昵近しまゐりて今なほ寵臣なるに
よりて。兄これを娟しとしてうち解られ給はねば。おのづから疎濶ゆゑもあらまほしきん。
然るをけふおひ掛なく。使を立られしその故をまづ知らねども目前の利くおも
いぞと汝がおもひは要ぞあらめ具に告よかしとぞ。と問れて珠之介阿容たる色なく。
その義は問せ給はずとも必しもやしあらぬ一大事にてそはかれ抑君御兄弟洪に権を
争ひ給ふ。快らず思ひ給はぬにぞいと愚なる俺們すら宜からずと思ふに况心ある人の親
族これを歎き疎族は識るも多かるべし。尉の殿は近き比その義に御心づかせ給ひて
御後悔大かたならず。かくて身弟と不和になりてある事情を按ませ給ふ。その初て弟が
欲しとのたまひける遠山松の湯銚を與ざりける是まさに所以のあれば、なからん兄弟たる猶
人の身に手足あると是同じ。よしや稀なる名器なりとも他人にこれを贈るにあらぬ。
弟の所望に任しなば猶わが家にあるに等し。譬ば右手に持たる物を左手に易

るに異ならず。倘これが弟に讐あらば身をも禄をも失ふべく立地にその宦家を
轗ひ亡さんとまでになるゝ必ずしもかりの物を惜みて兄弟不和にならせ給ひしは今更慚愧に堪
ざるに汝那首に赴きて。弾正に対面して。かゝる意を告て這湯銚を贈まゐらすべしとを
倍へよかし。かくても渠らち解けずして贈るものを受ずとならば直に館へ推参して入
道殿をもて高麗に愁訴せよ。然らば館の驚きなく弾正を諭しまさん主君諭解
なひなば渠も渋ることをえざるぞ。必和談は整ん。なほ万一のことあらば。されば重立たる
老党を這使にとて遣さるゝに。言咬ありて疑るゝ事もあらん。よりて汝に命まゐらす。
よくせよかしと叮嚀なる仰なれば。辞まるに由なく。膽太くも虎威を犯して見参を
請まゐらす賢相願ば骨肉の実情を信容ありて和睦ましまさねば。然らば使を
奉りたる在下が輩のほまれぞあるべき。御方の歓びならんと思ひぞらんさば思ひとも衆に
舒る言葉の花紅葉遠山松の湯銚の袱をとき解披きて莫合なる

さえあるよしなる。幼より脩六尺袖に匂ひ溢るゝ愛敬ハ武家の扈従の進退応
對柳條の袴の襞積よりも折目正しく國友の身退へやむを措ざりけり。有如之
程に國友ハ初ハ只侮りし珠之介に説諭されて且羞且呆漸く亡半晌許壮
裏の心中をなしうりし兄猛からち解て秘藏の名器を贈られ胸中測で言けれバ。
るい疑なく受取めざハ珠之介ハ御館へ参りそ入道殿に愁訴をせし彼熟視
るに這少年ハ標致といひ才といひ尋常のものにあらざれバ不慮に館のおん目にとまり
なく召使るゝとしもあらバ寵遇の害になるべし只速に和睦して這奴を還
すべし優ことあらじと尋思をしつ微笑つゝおもに微妙児使の口状尉殿さまに
某を愛させ玉ふを知ずして不悌の罪を遁くれしまで今さら後悔するに特に
秘藏の遠山松を賜れバとて受られんやと固辞せしを珠之介推返して刀祢今和
睦あるにも這湯銚を受ざるハ何を證拠に仕らん世に隔る兄友の千々の

黄金も辞せざるを断金の交とぞ。愛させ玉ふ例おはしめのあり況原是一腹なる兄
弟にすーはせバ過ぐる作貨とそも受も授けもするなるべけれ然るを今更固辞せ
あるハなほも疑ひあるに似て詰れバ國友脱る路なく困じ果て額を捫く寔に
汝ハ才子なり命ぶば這遠山松ハ吾の侭預り措べけれ何を報ひに進らせんと向ひへ
されく額をつけ海ならぬ御こゝろざし在下ごときが宣まで信容く且
向ひゆかんや果して愚意によはせなバ。おん報ひに及ぶべからず。きのふの灰に消にし
尉の殿の議しおはする阿波の三好を招んとある。おん使の義を御同意ありて那
議に任しおはすべし是目前の大利なり在下が云云と向ひにすゝめせし一條ハあのるに
あそびへとしふを國友聞あへずそハ亦汝がいふなるが三好が御方に参すまじぞその
利あるにあらねども凖のし御諚に従ひまゐらせ労して功なきのみならず敵に柔弱を
示さんのミ然でも利ある歟いかにぞやとせはしく問れさらぬ驍がぞの義も豫て

尉の殿の同者を彼地へ遣はして定かに探知し召れぬ緩に好いまや疑ふく。
御諚に従ひまつらぬとも。左衆の城を返さべし。倘又緯の障あらば左衆の城を
返さぬとも那地に到らば敵の強弱を兵士のヨメ寡まるも知らで還るべしや。
既に敵地の案内をよく知ると云ふ攻るに易からん渠が由断を聞かく。一挙に左
衆を攻撃べるに唯一く城を拔くべし。左衆の都會の福地に曩に喪ひ失ひ
しを。ぬくびあんるに入るとあらば。おのれの利潤ゆゆしぶ熟成
ひく。緯就と云ふ尉の殿の獨功あるのみならず。刀祢も御感に預るのみ。其に
その利を受るらん。おのれにくらべて同胞合體すべきぶりの憚るべき千
慮の一失御同意あらば公私の大事。その上やはぶ賢慮を回らく。熟く
計らせぬひと。利をもて薦る奸佞の萌いまに顯れて國友も亦貪りく飽
と知らぬ性なれば。一言毎にその意を汲く感ずると大ふ言ふべ。吁奇なるかな。

少年に早くも計畢ぶ意に稱へり。翌日戻めく出仕しく件のよしを執達せん。
尉殿も出仕しく御意を伺ひ。ひとすれのひ出れと仰せ。女曲を習ふ御
館中。この年来の怠慢を賠話すべきと。その是汝が奇才にしく同
胞和順合體の這般あるのみならば。計るべき如く那利を分ち現愉快なる事
べし。且く弟ぶく欲びの不無を思へ。されども兄の俟ぶんにとて立つのよりを待よ。
長のひとのひとて童扈従に持たる。刀を牽ぶ物に取らせ。珠之伏の
左右のみに受戴ぶく腰に帯び。額に拜しく恭しく。その欲びを述ぶけり。一説
やうなく果しく囲友に遠山松の湯銚を近習に持しく徐に奥に入る程に珠
之伏に執達の若嘗に送られく。玄関の真砂路に衝るらねど並べて
役者を招く意氣揚々と。靴も夏の天色に卯花月毛折ふ馬の足掻を
早めけ。嗚呼輭弱の一少年主家の胞兄弟を相和解く。遂に莫逆

出像第二十二
珠之介使
者く巧子
國友ふ説く
柳本ゑん正

末松ていめん

るゝあり。忠ゆく功あるゆゑ。さぶれその説く所利ゆ誘ふく義ゆ疎ゆう。是
奸佞の所行ゆく。智ありとゆふとも用ふべからざる。譬ば絆の急ゆ臨きゝ門を毀ちて
薪とする。井を塞ぐく臼とするもの。頓智即功ゆふ如。一旦事の要を失ふとも。
豈長久の術るらんや。然ば那利を負る為ゆ主従倶ゆ不測の罪ゆ陷るとの
るゝぞやと。識者ゆ窃ゆ評しけり。間話休題。その日香西四郎左衛門尉
元盛。柳本許遣したる。末松珠之丞を候程ゆ日ならず西ゆ傾く比珠之丞い
かゝり来て。那首の趣徒々と。朋友と問答の首尾。後まゝく演説と牽出物ゆ
なりけるゆとて。少くアせりぐ。元盛斜るゆ。執びく。はゝも軽忽深えこゆ
弟の速ゆ和順し。阿波へ使節の宿望さえ一時ゆ本意を遂んと。賢夏汝ゆ
大功ゆ叶ふゆ家の諸葛孔明。丹波數郡の所領をの。貴ぶるとも足ら
ぬ。末世の後ゆ後まで。比翼の契りを忘るゝとゆふく。連理の誓ゆ背くとく。

そゆ仇傍ゆ果らし。捨つ捨つ餘念ゆえ。寵愛日來ゆ弥増け。却説香
西元盛。次の日出仕する程ゆ朋友ゆ先ゆ。那首ゆ兄を俟てゆふ。その遠山
松の湯銚を贈られる歓びを叮嚀ゆ述疎遠を賠話く。阿波へ使節のあん
願ひを。向ゆ制めゆ。そ一ぢも熟思ゆ。之好の黨非如怠命ゆ応ぜぬとも。
敵の強弱地理まで。検まるとゆふ。御方ゆ利あらゆの旨を館へ高國ゆ宣べ
しゆ。御合點ゆく。誘ゆ共侶ゆ君遣ゆ伺候せぬ。那地へ發遣の仰ゆ
べ。時日を規定仕らんとゆふ。元盛歓びく。その使の吹ぶ和殿の心底具ゆ
知られて。雀躍ゆ堪ざるさうとく。躍て共侶ゆ主の身遣ゆ。道永
禪門高國の席を正し。元盛を招ぎ近つけ。前日汝ぐ説しゆ。之好を
招ぎ降すの一條。ようやその事成ぐくとも。敵地の容子い定ゆ知らんぬまで
ぬく。發向して。言巽を旋さべ。謀るゞ如く事成く。左衆の城をとり復さ

即這回の賞として元盛に賜んを勉よかしと仰せられ元盛満面笑を含み
君恩を謝し退き下り登時國友勝を進めく既に御諚に依るとは一日も
も元盛を那地へ遣しゆんとを願へくそれ時日を移さず世を知れ敵を
緯の障りなるべきゆゑん然れば明より三日を限り京師を出て摂津州に
尼崎より無船せば日数を阿波に到るべし勿論隊兵のヨリほとの敵疑
騒動せん然れば士卒多く路の程も亦危し因て士卒百名ほど三百名に
足らざるとても前より是なるの用心もあらまくいと真実こちらまもるべ
道永禅門領ぬくその議定に依て速に進發せよ今
より六日に吉左右を俟べしと元盛面目
身に余まりて言葉に退出けり是を傳聞く諸士亦適名誉や
羨むもあり或は又妬むものもヨリけり然程に元盛逆族の准備

志ろ。珠之丞もその身に等しく轎子に乗り隊兵一百餘名を引て黎明に
比首途を使節の命を稟より第三日とぞ定えける素より驕慢の性
その路々民を虐げ非法の課役を肩せ苦しと怨まざるの者なし
胥に守日の宿りに着て酒宴遊興に暁るを覚ぬ是も亦珠之丞の寵愛深
に慰しとの涙客舎の徒然を慰んとその所為けり現錦繍を裁ては歌
儛艶曲の俗楽に嫉妬蔓の害あるを知らず又梁肉に異を陳ねて七難八
珍の飲膳に農夫辛苦の畊を思ず慾ヨリければ貪れども足らず驕慢の故に
鄙吝なる冠をとらず猴なる虎の威を借る狐に似る這元盛が狼貪場
張を知るも知らぬも憎しけり行ひて遺く程に
ける。その時尼崎の城代石馬丞尹賢に抑件の尹賢に高國入道道永に
実方の叔父にける中務丞春供の三男なり彼身の為に従父兄弟親に

族るとて。道ホとれを一方の旗頭ホを立て。然るホとも尹賢ハ這回香西ニ盛を。阿波へ使節の路次云云と京より通達せられて。領の權臣ゆく。且國友が兄弟ハ宜く管待せられとく。豫て士卒ホ下知けり。れ屬日件の城ハ修復ホ工匠奔走しく。ホとく二佛山中間寺との城下の寺院を旅館とし。三度の饗食饌美を盡しく。香西主從と歓待しけり。元盛ハの地方より速ホ船ニ乗て。阿波へ渡らんと欲せるホ卯花降し晴間ニ風雨の為ホ抑留せられく。心ともなく日を弥るホ雨ゆう雲ハ晴れども。猶風ハ烈しく日々ホ港口へ催促しく。擽尻して居りける。有如之程ホ珠之丞ハ旅泊の徒然を慰難けん。有一日西三箇の從者をねぞの身ハ馬ようち乗ゆと。寺より出く城下のハ漫行をそりける。浩処ホ前面より。竹木累積登りたる車四五輌牽ゆて過りく。城へ入らんとするのあり。その処の路

陜かりけれども。馬より先ホ遣違しく。走りのけんとする程ホ轔る車の音高く。裏裏と地を響音して。迅雷ホ異ならねば。珠之丞ハ乗る馬。忽地ホ駭ル怕れく。屬強をあてけれハ主ハ鞍ホも堪ずして。隊ゑんとして駐めたる。怒ホ堪ず声ゆう立て。ホとも奇怪なる白物ホが。とりや車の走れバとく。武士ホ對ひく避もせず。剰馬を駭せ。これ狼藉ホあらずんや。者共彼奴を脱さるとて。負ホ似げるハ敦圉猛く。鞍坪敲ルく下知されハ西三箇の從者ホ。応もあず。走り蒐て前る車を推留めて。打撫を。當下車力の夫役ホハ此も怯ず。諸声ハ。理不盡ハ何ぞとする。武士ホもあれ。公家ゆもあれ。城主の御用で推ゆく車を其方の馬ハ騒げバとく。推留らるゆとハ。妨げとする。と罵て。林ホ。とるとハ。捶遣り衛退け。各車の前後ホ立て。牽ゆて去んとする程ホ。珠之丞ハいよく怒りく。馬戎馳寄せ。刀を抜て。右ゆホ立る一箇の夫役の。小髮の外を下と砍る。雖然浅痍

るりけるふ車力の夫役ハヨ人数ゆそ一輛毎ふ四人あり五輛合して二十許人の夫役ハ
ゑ物も怯ぎて彼所なる七駕を留めよと諸声烈しく雷散動ゆく車ふ積こふ
を來の材をるふく引抜らち振さく競ひ蒐まる勢ひふ當るくもあふぐりけ珠
之丈が從者ホハるとものぞ腰とものぞそ頻大ふ駕を怒られく不捷放せと
ぐりふ逃れ〻乱走せたの光景ふ珠之丈も駭怕れく物もゐるぞ馬の鼻
つ〻牽回らんと捨鞭拍てを逃うけるこれ盛ハくとも知らぐ是時港口ふ准備の
船より順風ふるふ纜を解くぐるのやゆん無れひと告來りけれぐさとて士卒を
急〻つ珠之丈を詣るふ物ゑん為欲馬ふ乗て城下のうゑ出るぐのまぐ還らぞと
笞えんぐ小らぐ途ふくあゑたん安衣皆出ふと焦燥て居ヨの士卒立前ふ立後ふ
從へ旅館を出くゆくとのまぐ幾るくぞさられば前面ふ馬を飛して來るのあり
是則別人るぐ珠之丈主從が那夫役ホる迂駕されて逃てあまぐ來つる髭の

髭の玄れる髪さふ振放されそのる体の恍げるふ況三箇の從者を
薄疳浅痍を肩ぬもるく流る鮮血を拭ひもあぐ後走ゆぐ走若る然程ふ
珠之丈ハ遽〻く馬より降て主のほとりふ跪ひ目今ゆるるのたひその故ハ箇様〻〻
と城の夫役の車力ホが狼藉の綜の趣彼よりあらけるのぞく身の非を飾りんを
外めて言語巧ふ告るぐ盛ゆく勃然と眼を睜り歯を切りたい安くゆるるの
ア元縦城くこの夫役ゆりとも管領家のあ使を奉る元盛が後類を打擲せ
ーハ言語同断の〻ぞ忍ぶべくふ武士る甲斐もありとられんゆまぐ遠くゆるぐふぞ
ゑ赶蒐て撃る留ふと声も烈〻く下知されば悠雄の士卒弁一応て戦ひ笞前
或ハ短鎗各〻武器を引提て逸足踏て駈んとさ元ふるる珠之丈ハ剣を直一力
つたぐゆるぐ馬ふらち跨り先よ進ぐ舊來路ハ甚奇直ふ乗返せを案内ふ衆皆
後れどく街衢を投てぞ走りける再説那夫役ホハ珠之丈主從をゆの隨ふ

赴走らんと故所に立集合ひ更に又車を推て。やくとのまぎ千町に及ぶ中間寺れ
方よりして。客様せ一隊の武士をの数凡二百ばかり是方を望て赴近つくを夫役
等弁一えんとく彼の正く那少年の一箇隊なる武士るん原来屬日中間寺に旅
宿をと尋ねる。京家の人々なりけるぞ。捕籠られてのやうべらんと逃ると言りて。
車を棄て城のうえ走り駆れんとする程よれ盛の士卒に。透もあらせじ叫と嘯て
遠ものの笠前を射出。近ぬ短鎗を見めて。矢庭に四五人突伏る見ゆる夫
役いとく怕れて。西へ走り東へ脱れて。往方もあらぬ迷ひけり。有如之やどの元盛に怒
氣を盛りけれ。士卒に下知して件の車を推並べて火を放さて竹木共に焼棄
けり。まるに聊慰めて。今いも見まじ双殿をとふ尹賢に恨るぞ。あらねども。
れも縄を解くとふけの順風にまかせて。渡海して。功成名遂て
父をふて。辺ひまらせんぞと飽まぞよ罵ける。珠之丞を慰め。士卒を役へ港口に投て

急ぎぞ。准備の伴舟二艘に。士卒に分乗らして。その身の船に珠之丞と
近習のものを乗らして。管絃を奏し酒うちの喫て。稍熱腸を冷せんと笑ひ楽
を酬酌して。寝るとも知らぬ珠之丞が膝を枕に臥けり。案に某生涯説那時に
撃漏される夫役に。辛く城中に逃入りて。即縛の趣を任せと訴る城主尹
賢に。家臣を城外に走らして。且元盛を去る那人々をその折に港口
走る船に乗て。士卒も倶に漕出れば。一人も送するぞと人命のひけ。
よりて撃れる夫役に。亡骸を撿ずに地方の者のよりも那訴に違ふとて。
元盛が檣に誇りて。車を焼棄城主を恨ぶく罵りくるるまでの時定なり
えうど。元盛をぞ。ぞりしかば然とそもせん彼に城に家臣に城に有ける
随に報けり。尹賢これをうちぬて。陽を断可る。慍怨に堪ずして。
せべ元盛に管領の普賢第恩顧の權臣に。使節の命を稟ると。今私の怨を

の。毅果一家その外見め亦こぞうに係るべ。然とくよりを訴く。讒断就請
すうもとる。元盛の第子原柳本因友ら。入道殿の寵臣ゑまで渠が為に譖
言せられ。遂て不測の罪をうん抑元盛因友ら年来民を虐げ驕恣を
恣を入道殿ら。ゑ晩得らぐ。国家の大事を任へ下情通ぜ。然る
のヨリ。勢ひの如くれば怨を秘して謀ふ不如と深念をつ夜とる
日とる。思を潜め枕を推ぐ。元盛を亡ぼ。計策をぞ旋けば。

第十回

讒を信じ道永壁臣ふ誓ふ
怨を秘し尹賢香西を陷る

話表右馬次尹賢ふ仕へる。矢野宗好とゆのありけり。原是阿波ぞ人氏
ゆく。三好希雲ゞ右筆ゑ。ふ希雲。高国ふ聚れ比その身い尹賢ふ
降参。と正首ふ仕へる。初阿波ふ在り時執筆ゞ宗好ふ。

大約三好の黨の花押印章を写し覚え此も達ることとく。折々人ふ説
誇ず。尹賢ふ不図ぬ出ぐ。ゑ究竟と獨悦び。躯て件の宗好を閑室に招
よ。東西ゑく取らせ。元盛を亡ぼ。怨を復さんと計ぶ。ゑ送もなく
其ゑ示ぐ。三好ゞ元盛ふ答る書翰の偽筆をぞ書せる。既ふて宗好。主命
黙止がたゑ。ゑ賜のヨリ。欲ぶ。一説ふ及ぶ。ゑ随ふ件の書
翰を書写め。左衛の敵将三好越後守勝時并ふ嫡子左衛門佐勝長等。
父子連署の花押ぞ。此も違へ。贋ふ。ゑ足ぬ。ゑ
大ぬ。却説大の比尼崎ゑ獄舎の中ふ繋れる偷児あり。原是左衛の
人ゑれ。尹賢これをも用ひんとく。獄長ふ。ゑ
尹賢竊ふ這偷児ふ。汝罪過重けれ。首ぞ刎ぶ。ゑ密
計ふ従ひ。左衛の三好勝時ふ。謀者と陽倡へ。這西京師へ奔ぶ。

つれ又竊ひ計ひく。汝を放遣すべきなり。その故い任ぜ[illegible]
較こりー意中の機密を詳ふ其ー示せば件の偷児欺び美て命助りゆぐ何ゾ
まれ仕らん左も右も計せぬといふ尹賢も欺びくゆゑと誨ゑどつ這偷児を
怪ーけ[illegible]旅客ふ打扮ーて更ふ又堅ーく紮めその詰朝士卒ふ牽きくみづ
く京師ふ走陟り高圏入道道永の邸ふ到り對面ーく請ゑ左右の人を
遠さけ側ふ寄て其ーく扶も香西元盛の莫大の御恩を仇ふして叛逆の企
あり。渠ゞ阿波へ赴くとく船出せーその黄昏ふ怪ーげ[illegible]旅客を城兵ふ捕捕
ーめゞいとも緊ーく責問せーふそゞ懐ふ密書あり。三好越後守勝時ふ左衛の
城より密使をつかーて元盛ふ答る状へ[illegible]ゆゑ[illegible]懐ふ[illegible]偽書を
でつ出く道永の膝のほとりふ[illegible]ーあり[illegible]道永禅門[illegible]取揚て披見ふ
その書の略ふ去逆帰順便旦一勇士一所庚幾足下近内應本

州討滅道永法師。將今聰明九。故管領源澄元之子。為管領。来翰
披閲。幸甚幸甚然山海脩阻猶隔靴搔癖也。因本月
渡海事。企望稍久。某以戍左衛。身不得預其席遣愚
息勝長。欲舒来會之驩。尺素不易盡言。聊以布親串。
大永五年。戊辰夏四月日。越後守三好勝時。左衛門
佐三好勝長等再拜。香西左衛門尉殿。とあり筆談とは花
押と云凝ふべくもあらぬ。道永禅門呆果て。[illegible]
息を吻く豈料んや元盛。かゝる逆謀あらんとは。敵の使いふかゝ
さんふ緯の證入るとのゝ。[illegible]牽せゆとのへば道永領ーく。小ら我ゞ[illegible]
そのふとりを[illegible]庭上へ牽せゆと指揮ふ尹賢ふ退ぞく。士卒に
かくと命ーけ[illegible]舊ふ著程ふ尹賢の士卒両三名那癖者を牽ゆ来く。

縁頼近く推居て登時尹賢進寄て癖者ふたち對ひく罪人知らぬ者の処へ
管領の御館へ尼崎ゆく首伏の趣を又云べ。管領笑せめんとて翠簾の那首ふ
ちうるぞといひつも目を注れば癖者いやあろ沒くゆくるゆくに幾遍も回て毎ま
いへぞうんや。某下雑兵へるふより且いるる弐ハ知らねども。いぬる比香西殿より左衷へ
密書を贈られたるとべその回報をせんとある主命を受く尼崎る旅館まで来に
けれど香西殿ハ既ふたゆ。渡海の船ふ乗走らせ。と留えよければ労して功るく帰り
去らんと考つる折巡邸の兵士ふる怪められ生拘られ呵責ふ堪ず首伏て難へ
前後違ぬ命運ふ竭れば今ハ沙婆ふ愛惜せんや。とあく首を刎ぬ。
覚期極めくいと万怯もせず勇氣の辯舌道永禅門窮問して尹賢を招
ち近つけ今癖者ぶふ所那書と吻合せ。うへハ元盛ぶ逆謀疑べらぶ。と見
ども三好ハ反間るうんも測ぶ。ゆりよ予く那癖者ハ且く和殿ふ預措んとく

尾崎へ牽のそゆて元盛ぶ帰帆を觀こ方便をゆて一箇も漏さぶ皆生拘て
注進ものへ必悠ゆて殺せぶ。倘又元盛帰帆の旨ふ船を倍敵を隠して
城を龍んとまるとあらぶ渠ぶを陸ふ陟るとるく。推捕龍くれて殿ゆ
ぶ。加勢の軍兵四五百名翌此方より遣さん。和殿へ立ゆてそとらの准
備肝要るうんと潜ふ示される尹賢ハ欣然と命を兼暇を請ひ士卒ふ
癖者を牽退くその身も續ぶく退りけ。ハ日柳本弾正囚友ハ聊恙
ありけるぶ終日宿所ふ臥てゆる故ふ尹賢の密訴のよを知らねども道
永ハ考るかうさま渠ぶる事を想像るよ元盛誅滅せられぶ囚友も又れを
恨て必他郷へ立退くべ。縱逆臣を討滅く京師へ参為ふ治るとも相も
押さる囚友ふ別まんゆの哀しちよ。要テとあれと深念とゆ。ぶ七百の
拵言誌をゆて神文ふ血を沃ぶをく渠ぶ出仕を俟ふその次の日ハ囚友ぶ

病著を安く瘥りて己の左側に出仕せしむ。道永禅門歎じて。故意閑室に
在りて對面し。この尹賢の密訴の趣緯悉くと說示して三好殿時勝長
に。元盛に対し。密書を取出さんせしむ。國友驚き且怕れて席を避
て罪を請ひ。道永さまざまに慰めて身邊に招近つけ。元盛野心
あることを。これは你が疎意あるを世に在る限り等しく存命死共伴ふと
のみ思ふ。誠心を知らせん為寫し置たる物をあれ後々までも證据に
なるべし。と。なほも慰めて件の誓書を取らせ。國友に稍安堵して謹て
披見するに。這回元盛が叛逆の事に。連坐の罪を負へる。五日身に天雷に
撃て碎けて。死して冥府の呵責を禀んか。の日一毫も食言あらば日本國中
大小の天神地祇氏神八幡大井云云と書あるに。神文に血を沃ぎ書
七頁ありけれども國友ひたすら戴き拜して感涙を押拭ひ君恩の淺からざる微

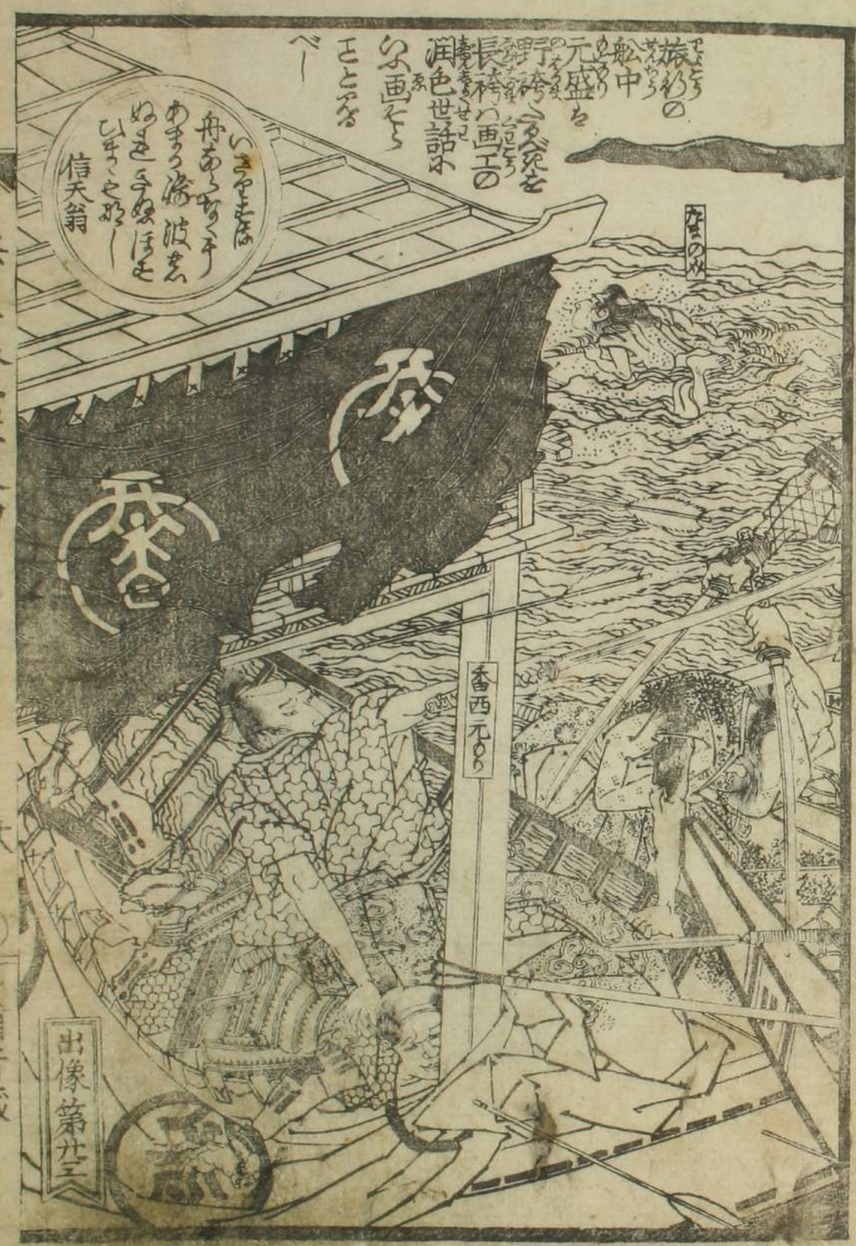
臣を思召す洪恩九の世を易るとも報ひ難し。兄はいたく九
族を罪なしめんとの事なりとも。いかで叛逆まつらんや。いよ忠勤を抽て國家に盟を
揣りて尊慮を惱ましめんと言葉を盡せり。道永禅門怡悅に勝ざ
の尹賢に約束をなれば加勢の士卒五百名を尼崎へ遣すべし。その義を計ひ
いたく世に隔てる主命に國友ひたすら異議を退て猛に軍兵を
鳩めよと。尼崎へ遣けり。有恁程に尹賢は尼崎へ立ちて快船
數准備をなし。且兵士の部署元盛主役帰帆せば脫走べしと下知しけり。
既に京師より加勢の士卒も來れば尹賢は後陣と定め港に
方に隱し置て元盛が來るを今か〻と俟ひけり。話表更題西國
左衛門尉元盛は渡海の船中異変を聞く。阿波州に著岸して那城に到
んとする程に三好筑前守元長のよりて渡海して老黨を召集め高國

入道道永へつゞ大父の家に況その家臣元盛民を蔑げ驕を極る烏滸の小人るるのを招待の使と稱く。ゆゝ来されしを奇怪るれ汝ホ士卒を招く。路路ホ推駐め速ホ追返せべし。異説ホ及ぶ一箇も漏さず殺せ棄よ。と下知せゝ三好ぶ光當その意を汲く軍兵多く従へく港口を望て走たり。けるぶ元盛ハ升陸ゝくまゞ一宿も歴ぶりゝホ一三好ぶ士卒ホ捕笞らまて一歩も進むとを汲ぶその隊の大將三好孫六郎秀一馬を乗居声ぶり立て。香西元盛ホ慥ホ覚け汝ぶ主る道永法師ハ嫡家を追退けて管領職と横領ゝ又詐を行ふく吾先君を害ゝたりあるとて元長主阿波の御所の公逆を將軍ホ為ゝ故京兆澄元朝臣の嫡男ホ御座を聰明九ホ管領職を紹ゝまゝ。せんとその軍説ホ暇ふ折ゝ。使節と倡へく推参せゝ。這地の容子を知まく欲る反間者ゆをあゝ皆悉生拘く。頸絞

刎ぶ元奴原ゝれども。汝ぞ如ぶ手負の小人幾百人殺ホ捕ども又何ぶ無ホ。あゝんそぶ仇ホ追返せとある。寛仁大度の下知ホよりて三好秀一向ぶ命惜くいとく立去れ異説ホ及ぐ目ホ物を。せんホぞ。と呼ぶ。その隊の士卒三四百名用を揚旗と敲ぶ素破とのぐ射く仆さんとく素雪を蹴るもヨりけれぶ元盛大く駭怕れて陳謝の辭を重ぶ秀一いぐそれと聴ぐ矢庭追立駈立く。港口へ推戻せぶ元盛ハ其術もなく。珠之衣の目を注ゝ俱ホ舩ホぞ無ゝけゝ況や百餘名の從者ハ主より先ホ族ゝと共伴ホ舩ホ乗て纜と解忙く揚て初て息ふけゝ元盛之隊より討ゝる生画餅とゝり一と旦羞且怕れく匂安ゝぐ雖然弟國友の資あれ熟成く主君の怒アを和解せん。ゆと空ゝ。ちく還らんとゝ。播磨の室へ舩ゝ歌。そゝの土産と買集ゆ京師の果ゝ。ぶれとく遂ホ播磨ホ赴ゝ室の津ホ逗留ゝ東西

まゝ貴取られ更に一艘の船を備へ積登たるに初の三艘をうけ船の是より一艘殖うけの程に元盛珠を以て密談し尾崎に到その入京師の
ものそ賓客の生捕にして人に会ふるとも後者に示し合て今の
尾崎に投て無之よりの日順風へられ已の日及に船を港口に入んとす
程に忽地暗嶋の烽火とゆく一道の火氣天に沖てその声耳邊に響く程
元あれ居ヨヌの快船漕顕れて一艘毎に三十餘名の兵士弓笠前短鎗を携へ
元の勢無慮三百人元盛四艘の船を八方より捕籠て逆賊元盛とくと
汝に三好に内応して敵と誘入れん為那地使節とのいらて阿波に赴て密談
者なり仗価既に畏覚なりその故に管領家の下知によりて汝を帰帆を候
既に久しく覚期をせしに異口同音に罵り漕よせて撃捕と競て荒れ
元盛亦復駭慌てのそ什麻にに船窓より半身を顕さく

人ときの悠のそ某素より野心なし其恨あるの譲言ありの身
京師に赴てまうし解元盛等の人と叫べども討なの士卒に聴なし
思へ元盛汝が船に三艘なるに其数ヨヌに敵の兵士を隠し無しその證
据分明なのなりせに撃捕れと諸声高く罵りそれに勢に乗ら
人と聞元に勢に制むるもあられ元盛主従已に及び且戦に且漕ひ
水際に寄せんとされ陸の方に大将尹賢京師より差来られる加勢の士卒と
後つくに敏く射る後前に透間なれ元盛主従度を失ひ射れに倫むに
なに元盛水陸の討なの為に捕籠られ元れ
来て漕る敵と戦に後乱馮る癖なれ船を漕返
送り寛分に撃捕られその身に数人所重蒼を肩に竟に首を捕られ
珠之以の戦に危くなる折上衣袴を脱垂て来の板子に掻抱に船より


出像第廿三

身を跳らして海に入り潮に任して浮つ沈つ流るゝ程に然ども討手の兵士の戦ひに暇
なく折るれば己れ一人のみにて香西が後類と一箇も漏さでとの競慌ただ勢
ひ乗じて船を出す無沈め室の津より備れ来たる物積船も共倍に打破られて水に
沈む。楫取水主等も殺されけり。然が右馬丞尹賢は一時の奸計行れて元盛が
亡骸を得せず。意中の欲びいかばかりもあらん。加勢の士卒に労ひて元盛が首級を実
検し。その餘軍立て首級共も悉く京師へ陣せんとて。士卒を纏め列を正して馬上
優に徐々と城中へ還りたる。その夜尹賢は矢野宗好と共に獄舎の内に繋ぎ置
たる那倫児に向ひ言葉を這回の密計行れて元盛滅亡せるは汝が功と第一と
き。是よりの金百両をのゝ〳〵前約のごとく放遣るべしと仰らるゝ。竊に逃去るべし。と
正首に耳元彼が獄舎より扶出し件の金を遮ら出せば倫児は欣び受て暇を
拝し別を告げ遂に城中を潜び出でゝ九十町あまり。一業敏捷く林の深きを過ぎ

とする程に忽地後方に弦音高く。一條の征箭蜚来りて倫児を射倒し
けり。衣所の深疵なりれば叫びもあへず仰反て血に塗れて息絶る。此は尹賢の隊で
計らひ件の倫児を助け措き渠が密謀漏れて身の禍に及ぶを恐れ
竊に殺して根を断べし。と予思をつて矢野宗好に謀計を授け金を齎し一旦渠を
放遣りて途ゆくを撃せしに有徳者矢野宗好が倫児の武を接て林の中也
とれを射殺して其の頸を捕り件の金をもとり復して城中へ帰りつゝ竊に尹賢に
アセしに尹賢即貴禄と金を宗好に取らせけり。是より矢野尹賢に腹
心の士卒に下知して這回の遺恨いと盛に龍陽珠之丞とらの奴より事起りたる
よりこれ少年とそこなん中一箇も漏さず殺すべしとの竊に命じ給ひより。
事果てその屍を元彼と換るに童髪後とぶりの両箇なりしかば知る
ものなきを問ふに珠之丞はあゝ〳〵と泣て陸の戦ひより脱れるものあり

とも覚えざるまでに水中に欽沈めみづ〳〵海に飛入く死〳〵るもありけれ珠之介も入水して亡びたるや疑ひなると士卒ホど皆のよりの尹賢も然あらんとて遂に素より已むけり。却説その話朝尹賢に加勢の士卒共倍に京師は陣り道永に見参〳〵元盛伏誅のよりを演説し隊ての擒ゆせよとの仰を受めへども渠に三好が隊兵を別松に隠し無せく初め倍を多勢なるに元盛主従必死を極めく強く防戦ひ〳〵敵も漏さじとぞ皆撃果しを。首級を刎ひ又郷高に生拘りたる三好勝時ホど間諜者に戦ひ果しその夜さら獄舎を破りく逃亡せしを雑兵ホが赶蒐く敵も留めんとせしホども那奴が首級をも持しまゐれどその餘の者に云云と報て実検に入れば道永禅門詰るよりなくその有功を賞せるに又柳本因友に主の仇書ホ感服しく。厚しとぞ事の虚実を召問ひぐ兄元盛を討れを聊も怨とせず還て尹賢を

労ひなるべ尹賢に応ホ優る。綜十二分の首尾を以て身の暇を賜ひ尼崎へ〳〵ひ〳〵ける。扨も香西元盛大く驕る伝人を亦不測の罪ホ陥りを後類と俱ホ亡び〳〵。寔ホその所為ひ。されば又尹賢も謀を行ひく。私の怨を復し又密計を行せる。偷児を敷殺しその隠慝を漏さじと底深く計ひを是戦世の悪俗の奸詐ホ長ける情状その本元を推と云ハ道永禅門理義ホ暗く男色龍陽の惑ひより柳本香西ホの伝人を親愛ひく因の大事を任しを貝冠の沙汰の致を所ひ人貪戻るべ〳〵せば一因乱を図ざんやその後三好長慶義長陪臣ひく主を制。二世因命を執るホ至る是その綜の張本へ案下某生再説。

末松珠之介曩ホ討るの大勢ホ捕笠竜られく主従危窮ホ及び折免れ果て。とぞ〳〵かぞ板子を抱れ入水して潮ホ任しく流るとのくだく里るを知らぬ身ハ最大う疲労ひ心地死ぬく覚し比磯打浪ホ揺揚られく。おのぞ濱邊ホ

寄たりけるまで板子を乗て臂近高岩ゐをかけ取留めゝが偶然と息絶て人ゐ后のゐを知らぬ助る人のなかりゝぬるもあゐ絶せる命根なりけんなのづゝ甦生やゝ四下を見ゐ日の暮たり何国の荒磯なるを知らぬ漂く水を飲むるゐ腹の中尾刺めく苦ミゐ堪ぢりけるが岩頭ゐ腹を押當て頭を低く推る程ゐ累く水を吐くより後くこれゐ復りゝぬるも事ゐ浦の苫屋もあゝぐ夜半の月のこと鮮明なり単衣の潮垂まゝ極よせて彼此と絞るゐ力なきめゝ五月の初旬なりけれど秋涼く凌ぐゐ易から人家あゐ方る赴くまゝ敵地狩外嶋狩地方の名をも詔ぬべく一椀の飯をも乞めとく月を燭ゐ覚束なくも人家を索て辿りけり畢竟珠之次ぐ這海濱ゐ流寓く又甚麽なる話説なるゐそを次の巻ゐ解分るを聽ゐゝ。

近世説美少年録第二輯巻之四終

（村田）

文章本天然

文章本天然